戦国時代の覇者毛利元就（前編）

毛利元就（もうりもとなり）と言われて名前は知っていてもどんな事をした人かを語れる人は戦国時代が相当好きな人でしょう。

「三本の矢」で思い出される方もいらっしゃるかもしれません。

毛利家は元就の死没後、孫の輝元が関ケ原の合戦で石田三成の西軍の大将に祭り上げられ、徳川家康に対抗して敗戦し、戦後中国１０カ国１１０万石の大大名から周防、長門（長州）の２か国２９万石に減封され、江戸時代を生き抜きます。

しかしこの長州藩が桂小五郎や高杉晋作を生み、徳川幕府を倒し明治維新政府を立ち上げたのです。

見方によっては長州毛利家は関ケ原の合戦の意趣返しをして天下を取ったと言えるかもしれませんね。

江戸時代毛利家は徳川家が嫌いです。徳川家はそれに感づいていました。用心もしていました。

歴史は続いているのです。

それでは毛利家はどんなお家なのか探ってみましょう。

大変な旧家です。

鎌倉時代にさかのぼります。

源　頼朝が鎌倉幕府を開設するときに、政務官が必要となり、京都で実務に明るい公家大江広元をスカウトして来ました。

広元は朝廷の事情に明るく、頼朝に貢献しました。関東の武将にも匹敵する処遇が与えられました。

複数の荘園の地頭に任命され、そのうちの一つに相模国（神奈川県）の毛利荘の地頭がありました。

安芸国（広島県）の高田郡吉田荘の地頭を得たのは息子でした。

その後北条氏による三浦一族の粛清に大江家も巻き込まれ、本家は滅亡しましたが、孫の一人が吉田荘の地頭をそのまま許されました。

そして孫の子、即ち大江広元の曾孫の時親（ときちか）が地頭職を継承し安芸国高田郡吉

田荘に移住してきました。
　北条氏にはばかって大江姓は名乗らず「毛利」を名乗ります。
　毛利氏の領地は吉田荘の半分ぐらいです。郡の中のいくつもある荘の半分ぐらいです。
　吉田荘は安芸国（広島県）の高田郡にあり、高田郡は石見国（島根県）に接しています。現在の安芸高田市です。広島市の北東で島根県に接しています。
　毛利氏は鎌倉末期から南北朝の間、後醍醐天皇や足利尊氏に味方して存続していきます。
　室町時代は、地方は守護大名が支配していました。安芸国の守護は武田氏ですが、室町時代も下り戦国時代に入りますと、武田氏の勢力が衰え、毛利氏などの多数の国人領主（荘、郷を支配の小領主）が力を持ちます。
　そこに周防（山口県東部)、長門（山口県西部)、豊前（大分県北部・福岡県西部)、筑前（福岡県北部）の守護の大内氏が安芸国へ勢力を延ばしてきます。
　１５～16 世紀の初期のころは大内の勢力が一層強くなり、毛利氏など国人領主の多くは独立性を持ちながらも大内氏の傘下に入ります。
　当主大内義興（よしおき）は地元山口から出張し、京都で細川氏と実権争奪で争います。

　そのころ元就は誕生します。明応６年（１４９７）３月１４日です。父は弘元で４歳上の兄興元（おきもと）が嫡男です。
　弘元は３３歳で８歳の嫡男興元に家督を譲ってしまいます。もちろん引退しても変わらず一家、一族を支配します。
　弘元は４２歳で病没します。
　後は既に家督を譲られていた興元です。大内義興の配下として一緒に京にも行きます。
　しかし大内義興が京に１０年も滞在している間に出雲国（島根県東部）の尼子（あまこし）氏が台頭し、その勢力が安芸や備後に延びてきました。
　毛利興元は安芸の国人領主間で一揆同盟を結びながら自立を目論むも、尼子氏の傘下に入ららずを得ない情勢となります。
　大内氏の来援が期待できないからです。大内氏は九州北部の対策を重点としたからです。
　しかし興元は２４歳で病没します。

興元の嫡男は子の幸松丸２歳です。この子が毛利家の当主です。
叔父の元就（もとなり）が毛利一族を仕切ることになります。
ところがこの幸松丸が９歳で死没します。
兄興元３４歳、その子９歳と短命の当主が続きます。
ここで毛利一門、譜代の国人領主たちの推戴で元就が家督を相続し、毛利家の当主に就任します。大永３年（１５２３）のことです。
この頃は大内氏を離れ、出雲の尼子氏の傘下に入っていました。
ところが尼子氏は元就当主就任に賛同しながら、その後元就の弟元網を当主にすべく毛利の一部の譜代国人領主と策謀します。
元就は弟を殺します。
そして尼子氏と縁を切り、大内氏傘下に戻ります。
系図がややこしくなりますので「毛利氏略系図」を後掲します。ご覧になりながらお読みください。

毛利氏は安芸国高田郡吉田盆地の国人領主です。
一郡も支配できない小領主で、貫高で３０００貫位と言われていますので、収穫ベースの石高で１万石位でしょう。
兵員動員力は４～５００人位です。

戦国時代の中国地方の大内氏と尼子氏も兵員動員力は２～３万はあるでしょう。この両雄の狭間で生き延び、元就はついに両雄を倒し中国地方を制覇することになるのですが、そのいきさつを語ることにします。

大内氏ですが、周防（すおう）国（山口県東部）の国衙の官吏から身を起こし、室町時代の初めには周防国・長門（ながと）国（山口県）、豊前国（大分県北部）、筑前国（福岡県北部・東部）を支配し、次いで石見国（島根県西部）、安芸国（広島県）、備後国（広島県東部・岡山県西部）をも支配し、室町幕府でも最大の守護となり、戦国時代には京で管領細川氏と実権を競う権力者となっていました。
百済の王が祖先と称しましたが、不明です。

一方の雄尼子氏は、室町時代に出雲国（島根県東部）守護の京極氏の守護代であったものを、戦国時代に入り、下剋上で主人の京極氏を追い払い出雲を乗

っ取り支配し、伯耆国（鳥取県)、因幡国（鳥取県）そして更に大内氏の勢力範囲の安芸国、備後国にも進出しようとします。
　中国地方は大内に対抗する尼子氏が台頭してきたのです。

　毛利氏は独立性の強い国人領主でしたが、その規模は一群に満たない荘単位の領主で、大内氏か尼子氏を選んでその傘下となる道を選ばざるを得ません。
　大永３年（１５２３）毛利家当主に就任していた元就は結局大内氏を選びます（大永５年)。尼子氏が自分を排斥しようとしたことがあるかからでしょう。
　元就は安芸国で大内氏方として尼子方の国人領主と戦い、強い武将として名が広がり、安芸国で有力な国人領主になります。
　尼子の当主晴久（はるひさ）と和議することもありますが、大内氏の傘下です。
　天文６年（１５３７）長男隆元（１５歳）を人質として大内氏の本拠地の山口に送ります。大内氏の家臣となります。

　尼子氏は因幡、美作、備前の一部に進出支配し、更に安芸国進出への的は大内方の毛利氏にしぼります。
　毛利氏の本拠地高田郡吉田荘の郡山城を尼子晴久の軍３万人が囲みます。元就は同盟の国人領主８千人を動員します。大内氏も援軍１万人を送ります。
　予想を覆し晴久は敗退し、出雲に退却します。天文９年（１５４０年）のことです。
　元就強しと地域のリーダーとなり、元就の名が全国区になります。
　大内家当主義隆（よしたか）は安芸国で支配力が増します。そして尼子組みやすしと見たのか、天文１１～１２年（１５４３）にかけて尼子の居城出雲の月山富田城（がっさんとんだじょう）に総攻撃をかけます。毛利氏はじめ安芸の大内傘下の国人領主も参戦します。
　しかし今度は尼子に跳ね返され敗戦で、義隆は山口に撤退し、元就も吉田荘に戻ります。
　この後安芸国は尼子氏からの毛利氏への総攻撃はありませんが、尼子方の国人領主と毛利氏の攻防戦が各地であり、尼子氏は援軍を送りますが、大内氏は援軍を送りません。
　毛利氏は大内方の国人領主と一揆同盟を結び、リーダーとなって戦います。
　国人領主は大内氏ではなく毛利氏の傘下になり、更に毛利氏の家臣となって

尼子方の国人領主と戦います。
　しかし毛利氏が大内氏の家臣であることは変わりありません。

　元就は安芸国内で同盟強化のため婚姻政策をとります。
　毛利氏の安芸国高田郡の南の豊田郡竹原の有力国人領主小早川氏で、同じく大内氏傘下で、共に戦ってきた仲間です。
　後嗣が死に跡継ぎがいなくなりました。毛利氏から迎える話が、家臣団から又大内義隆からもあり、元就は三男隆景（たかかげ）を送ります。更に小早川家の本家（沼田）にも後嗣が途絶えそうになり、隆景が家督相続します。
　毛利氏は北の盆地から瀬戸内海に進出できました（天文１３年)。

　更に吉田荘の北側の有力国人領主吉川（きっかわ）氏にも後嗣が死に後がありません。
　吉川氏とはすでに姻戚関係で元就の正妻の実家であり、姉も嫁いでいます。
　しかし吉川氏は尼子新宮党言われる尼子庶家と親類で、これまで尼子方になったり、大内方になったりで、元就にとっては危うい存在です。
　ここで自家の傘下にしてしまうことは何よりのことです。
　次男元春を養子として送り込みます（天文１６年)。
　吉川家臣団も戦に強い元就の下で自分たちの存続を図ったのです。

　次いで元就は家臣団の統制も強化します。反抗的な一族、家臣を粛清します。
　元就は安芸の東側で尼子支配の備後に進出を開始します。
　大内氏との関係は良好です。山口に山内義隆を息子たちと表敬訪問します(天文１８年―１５４９年)。

　安芸国で大内氏の傘下の国人領主が毛利氏の家臣となっていきます。
　毛利氏家中での勢力は増していきます。
　前編はここまでにします。後編はいよいよ中国の覇者となる道筋をお伝えします。

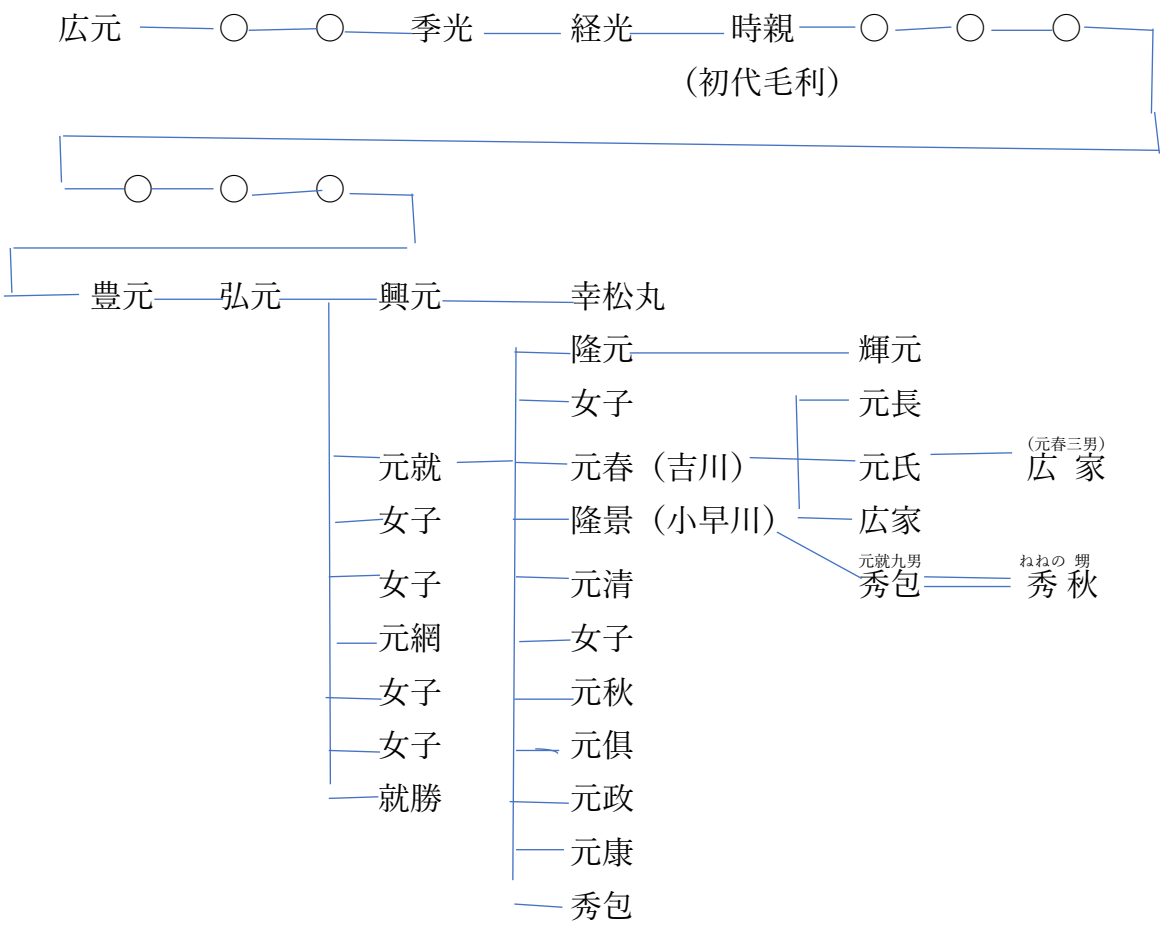
以上

２０２３年8月１４日

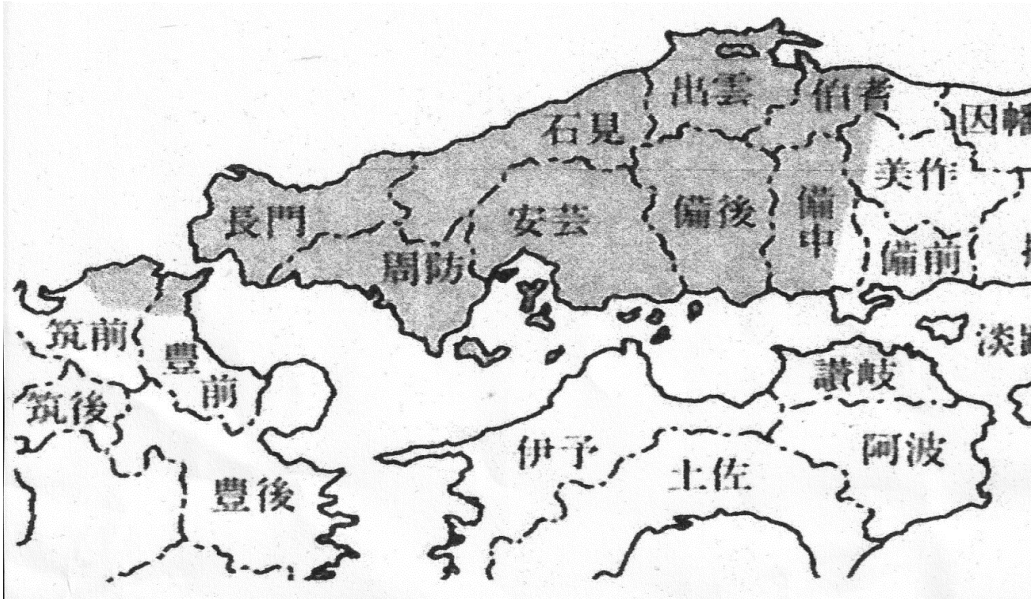
梅　一声

「毛利氏略系図」

（大江）



戦国時代毛利氏最大支配地域



安芸国
安芸
備後
吉田
高田郡
山県郡
安北軍
佐東郡
豊田郡
佐西郡
賀茂郡
安南軍